

すずきじろうの「あずま街道」

No3 旧名取郡 名取市内編

「あずま街道」の紹介も、いよいよ最終回です。今回は、名取の南今なお古あずま街道の風情を残す愛島蔵神から深い竹林・杉林の中にある道祖神社の参詣道を通り、全国で熊野三社が分祀され祀られているのは本山以外ではここ名取だけと云われる熊野三社を詣で名取川の栗木橋まで歩いてみましょう。

笠島山の岳陵道より蔵神で降りた「あづま街道」には鎌倉時代より学問(主として数学)が伝承され「学市(がくいち)」といわれていた。現在でも、字名として使われています。そのような珍しい地名も残る名取のあずま街道を紹介します。

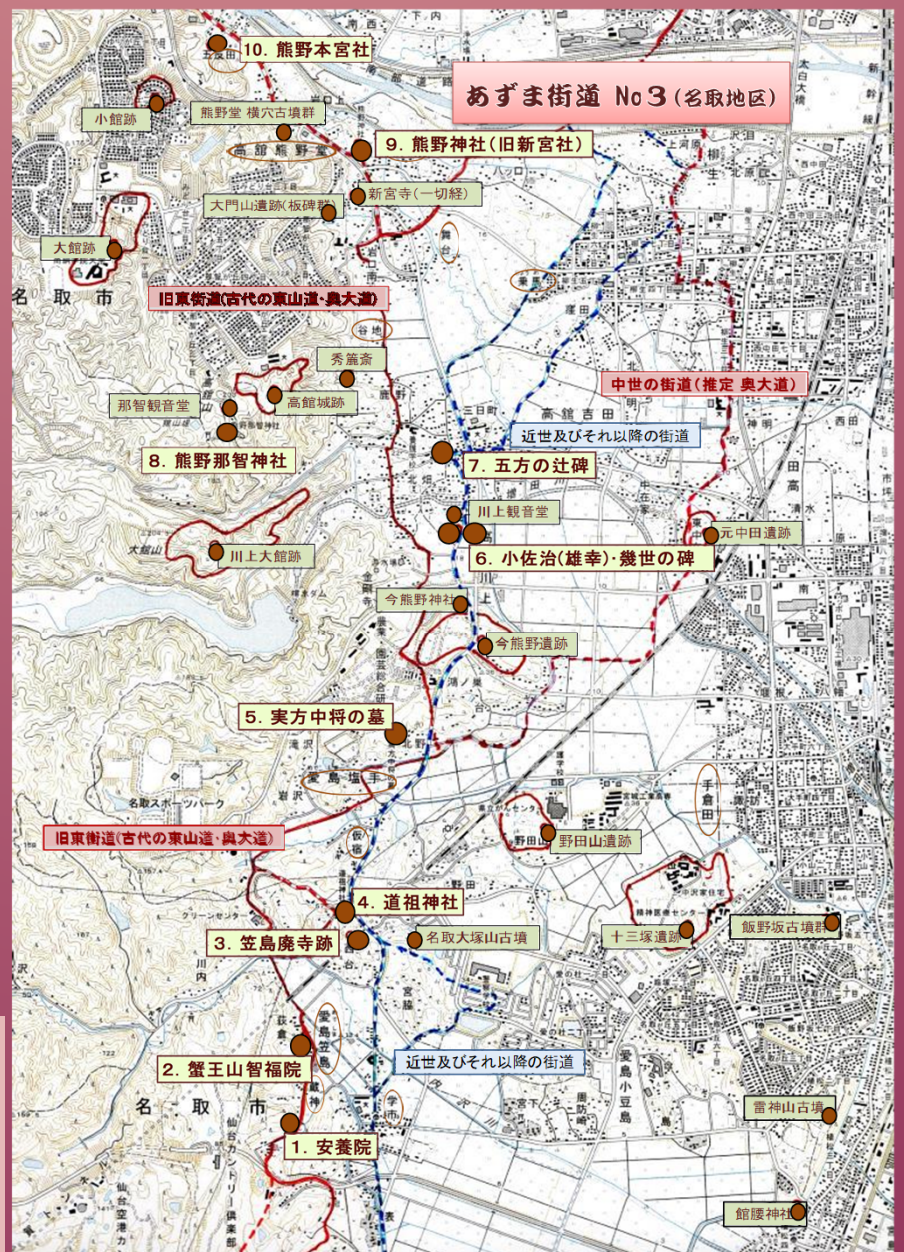


1. 安養院 名取市愛島笠島西北沢27
蔵神の真言宗智山派瑠璃光山安養院は熊野堂の熊野山新宮寺の末寺と言われるが、寺の由来縁起一切が不明である。本来は「あづま街道」の路傍に創建された寺院で、現在地の東向かいの丘陵にあったが、道路の変遷で何時の頃から現在地に移築されたのだと言われる。山門の処に十数基の供養碑に混じって、一基の「倉上茂右衛門菩提」と刻む供養碑がある。「文政二年関流算術門人一同」と施主名が刻まれている。



2・蟹王山智福院 愛島笠島字上北沢2
全国でも珍しい蟹を祀る曹洞宗の寺。全国で二か所だけ。もう一つは、京都・蟹満寺。約500年前から蟹にまつわる伝説が伝わる。近所の召使いの少女が、大蛇に襲われたのを助けた蟹を祀る。蟹は脱皮して長生きする。― 長寿のシンボル

日ごろ少女からエサを貰って世話になったお礼に助けた。― 報恩の教え



3. 笠島廃寺跡 (市指定)記念物史跡

名取市愛島笠島字西台32

笠島廃寺跡は、現在の佐倍乃(さへの)神社(道祖神社)の表参道沿いに位置し、東街道の名残りとどめている竹やぶの中にひっそりと存在している。

昭和26・27年に一部発掘調査が行われ、塔跡の心礎と思われる巨大な石や、西側の畑地にある平坦な地形の場所からは、古代の布目瓦(ぬのめかわら)などが発見されている。出土品は、奈良・平安時代のもの。



4. 道祖神社(佐倍乃神社)(県指定文化財有)

名取市愛島笠島字西台1-4

御祭神:猿田彦大神、天鈿女命

境内にある由緒書きを刻み込んだ石碑によると「佐倍乃神社は、元禄2年5月俳聖松尾芭蕉の「奥の細道」行脚の時、「笠島はいずこ五月のぬかり道」とよんだ句にある名取市愛島笠島に鎮座している神社で、旧社号を笠島道祖神と称した。祭神の猿田彦は、日本武尊の道案内をしたと言われていることから旅や交通安全の神、また、猿田彦大神、天鈿女命が天孫降臨をキッカケに結ばれたことから、現在では、縁結びの神様として信仰されている。

5. 実方中将の墓 名取市愛島塩手字北野42

光源氏のモデルと言われる貴公子を祀る。

中古三十六歌仙の1人、中将藤原朝臣実方は、藤原行成とのいざこざから、天皇より陸奥守に任ぜられ陸奥国へ下った。

出羽国千歳山阿古耶(あこや)の松を訪ねての帰り道、名取郡笠松道祖神の前で落馬、長徳4年(998)11月13日この地で亡くなった。この非運な死を哀悼して、西行法師、松尾芭蕉が名取の地を訪れた。墓の近くに実方と西行の歌碑と芭蕉の句碑がある。



6. 小佐治(雄幸)・幾世の碑 名取市高館川上字五性寺

悲しい物語が残っています。

旅の若者が桑島長者という富豪に一夜の宿を求めた。長者は快くこの求めに応じて若者を家に泊めた。ちょうどその晩、盗賊が長者の家を襲い幾世姫をさらおうとした。若者は盗賊と戦い、追い払いました。長者はこの若者に感謝し、この家に留めおかれる内に幾世姫と恋仲になったのです。

長者も婿養子にしたいと懇願しましたが、雄幸丸は蝦夷松前への旅の途中であったため再会を約し、再び旅に出ていきました。幾世姫は、何年も何年も雄幸丸を待ちました。

ある日、鎌倉管領足利諸氏から求婚の申し出に姫は雄幸丸のことが忘れられずに思いあまって、青熊川(増田川)に身を投げて死んでしまいました。雄幸丸が戻ってきて このことを知り、大層嘆き、その晩に雄幸丸も自害してしまったという話です。





7. 五方の辻碑（市登録文化財）高館川上字東北畑 那智神社を遥拝するお仮宮

五面体の石に五街道の目的地を彫った道標

五方の辻碑は、あずま街道(山道と東海道)が合流・分岐し、さらに村田街道、秋保への道、閑上への道の、5つの街道が交差する高館三日町の、五方の辻にたてられた道標((みちしるべ)で、現在は那智神社を遥拝するお仮宮境内の鳥居の下にある。この碑のような五面体の石に五街道の目的地を彫った道標は県内でも珍しいものである。

8. 熊野那智神社(国・県指定有形文化財有)

名取市高館吉田字館山8

伝説によると養老3年(719年)閑上の一漁夫が海底から神体を得て、高館山頂に宮社を建て 羽黒大権現として祀ったと云われている。後、名取の老巫女の熊野三神勧請にあたり、那智の分霊を当山に 合祀し熊野那智神社と改称した。

後世伊達家の厚い崇敬を得、社殿の造営や社地の寄進などを受けた。また付近から発見された多くの供養碑は往時の熊野信仰の盛況を伝えている。

現在は作物・豊漁神として広い信仰範囲を形成している。なお、社宝の慈仏・銅鏡は国指定重要文化財となっている。



懸仏(かけほとけ)・銅鏡(どうきょう)

国指定 懸仏・銅鏡41点、県指定 懸仏・銅鏡114点

明治31年(1899)、那智神社再建の折に社殿の床下から多数の懸仏・銅鏡が見つかりました。懸仏は平安時代の中頃になって神仏習合の思想が発達すると、もともと神社にまつわられていた鏡に、神社の本地仏を表現し、信仰の対象としたものです。



那智の滝 本山よりは、規模は小さいですが(高さ3m)

紀州の熊野古道を彷彿させる小路を行くと神社の裏側に那智の滝があります。散策には自然と一体になった感じが。みなさんも是非散策を…



奥州三十三観音一番札所：紹楽寺観音堂

平安時代初期の延暦13年(794年)から貞観6年(864年)に生きた円仁(慈覚大師)によって、のちに「奥州古札所」とも呼ばれる三十三観音霊場が開基されたと云われています。一方、「名取の老女」として知られる「旭」が、平安時代後期の保安年間(1120年-1124年)に名取熊野三社を勧請した際に、新たに三十三観音霊場を設定したと云われています(第1番から第3番までの札所は、名取熊野三山の南東に隣接して存在しています)。



熊野堂神楽と熊野堂舞楽

県指定民俗文化財無形民俗文化財

熊野堂神楽(左)は、その起源は文治年間(1185~90)に京都の神楽岡から伝わったものと言われ、熊野堂舞楽(右)は、貞観2年(860)慈覚大師の山寺立石寺(山形市)開山に従って来た渡来楽人の林家の系統を伝えたものと言われています。



10. 熊野本宮社 名取市高館熊野堂字五反田34

本宮社は本宮十二神ともいわれており、主神は家津御子神(けつみこ)を祭り、作物神である。現在地には万治元年に遷宮し、以前は現在地より500mほど離れた小館と称する山に鎮座したと伝えられている。

又、小館は五反田(その昔、御託宣田が訛ってこう呼んだらしい)とも言われている。本宮の本地仏は阿弥陀仏とされ、西方娯楽浄土への信仰は武士から民間にまで浸透していた。

熊野本宮社十二神鹿踊(市指定民族文化)文安年間(1444-1448)に米沢の屋代郷から山伏修験者によって伝えられたものと言われる。現在は五穀豊饒を祈念して例祭の時に舞われている。



ほかに、あずま街道沿いには沢山の見どころ・文化遺産があります。

国の重要文化財に指定され新宮寺に保管されている3000巻あまりの一切経・新宮寺文殊堂には本尊である「文殊菩薩」があります。

また鎌倉から室町時代にかけての大規模な墓所・供養所であると考えられる大門山の板碑、百数十基を数え7~8世紀に造られたものとされる地域豪族の集団墓である熊野堂横穴墓群。

そして中世の典型的な山城城跡跡である高館城跡と熊野信仰布教に関わった修験集団の政治・軍事・宗教面での拠点施設であったと考えられる大館跡などがあります。

熊野本宮社を参拝し、いよいよ歌枕で有名な名取川に到着しました。ここまで3回シリーズでは、あずま街道に残る文化遺産を中心に紹介しましたが、次の最終回は今に残るあずま街道の風情を紹介します。